

曾谷入道殿御書

文永一一年一月二〇日 五三歳

^{じ かいほんぎやく} 自界叛逆の難、^{た ほうしんびつ} 他方侵逼の難^{既 合}すであひ候ひ了んぬ。これをもってをもうに「多く
^{おんぞく} 他方の怨賊有^{しんりょう}って国内を侵掠し人民諸の苦悩を受く。土地に所楽の処有ること無けん」
 と申す経文に合ひぬと覚え候。当時壱岐・対馬の土民の如くに成り候はんずるなり。是
^{ひとえ} 偏に仏法の邪見なるによる。仏法の邪見と申すは真言宗と法華宗との違目なり。禅宗
 と念仏宗とを責め候ひしは此の事を申し顕はさん料なり。漢土には^{ぜん む い こんごう ち ぶ} 善無畏・金剛智・不
^{くう} 空三蔵の^{おうわく} 誑惑の心、天台法華宗を真言の大日経に盗み入れて、還って法華経の肝心と天
 台大師の徳とを隠せし故に漢土滅するなり。日本国は慈覚大師が大日経・^{こんごうちよう} 金剛頂経・
^{そしつ じ ちんご} 蘇悉地経を鎮護国家の三部と取って、伝教大師の鎮護国家を破せしより、^{えいざん} 叡山に悪義出
 来して^{ついで} 終に王法尽きにき。此の悪義鎌倉に下って又日本国を亡ぼすべし。弘法大師の邪
 義は中々顕然なれば、人もたばらかされぬ者もあり。^{しかくだいし} 慈覚大師の法華経・大日経等の理^り
^{どう じ しょう} 同事勝の^{いか} 積は智人既に許しぬ。愚者争でか信ぜざるべき。慈覚大師は法華経と大日経
 との勝劣を^{き しょう} 祈請せしに、^や 箭を以て日を射ると見しは此の事なるべし。是は慈覚大師の
 心中に^{しゅら} 修羅の入りて法華経の大日輪を射るにあらずや。此の法門は当世^{えいざん} 叡山其の外日本
 国の人用ふべきや。若し此の事、^{あにしゅみせん} 実事ならば日蓮壹須弥山を投ぐる者にあらずや。我が
 弟子は用ふべきや如何。最後なれば申すなり。恨み給ふべからず。恐々謹言。

十一月廿日

日 蓮 花 押

曾谷入道殿